

美しき死の岸に

原民喜

青空文庫

何かうつとりさせるような生温かい底に不思議に冷気を含んだ空気が、彼の頬ほおに触れては動いてゆくようだった。図書館の窓からこちらへ流れてくる気流なのだが、凝じっと頬をその風にあてっていると、魂は魅せられたように彼は何を考えともなく思い耽ふけっているのだった。一秒、一秒の静かな光線の足どりがここに立ちどまって、一秒、一秒のひそやかな空気がむこうから流れてくる。世界は澄みきっているのではあるまいか。それにしても、この澄みきった時刻がこんなになさしく心に泌しみるのはどうしたわけなのだろう……。

ふと、視線を窓の外の家屋の屋根にとめると、彼にはこの街か

ら少し離れたところにある自分の家の姿がすぐ眼に浮んできた。その家のなかでは容態のおもわしくない妻が今も寢床にいる。妻も今の今、何かうつとりと魅せられた世界のなかに呼吸いきづいてい
るのだろうか。容態のおもわしくない妻は、もう長い間の病床生
活の慣ならわしから、澄みきった世界のなかに呼吸いきづくことも身につ
けているようだった。だが、荒々しいものや、暴あばれ狂うものは、
日毎ひごとその家の塀へいの外まで押し寄せていた。塀の内の小さな庭には、
小さな防空壕ぼうくうごうのまわりに繁しげるままに繁った雑草や、朱あかく色づい
た酸漿はおずきや、萩はぎの枝についた小粒の花が、——それはその年も季
節があつて夏の終ろうとすることを示していたが、——ひっそり
と内側の世界のように静まっていた。それから、障子の内側には

妻の病床をとりかこんで、見なれた調度や、小さな装飾品が、病人の神経を鎮^{しず}めるような表情をもつて静かに呼吸^{いき}づいているのだ。——そうして、妻が病床にいるということだけが、現在彼の生きている世界のなかに、とにかく抛^よりどころを与えているようだった。

彼の呼吸づいている外側の世界は、ぼんやりと魔ものの影に覆^{おお}われてもの悲しく廻転しているのだった。週に一度、電車に乗って彼は東京まで出掛けて行くのだが、人々の服装も表情も重苦しいものに満たされていた。その文化映画社に入社してまだ間もない彼には、その運転は漠^{ばく}然^{ぜん}としかわからなかったが、ここでも何かもう追い詰められてゆくものの影があつた。試写が終ると、

演出課のルームで、だらだらと合評会がつづけられる。どの椅子からも、さまざまの言いまわしで何ごとかが論じられている。だが、それらは彼にとって、殆ど何のかわりもないことのようにだつた。殆ど何のかわりもない男が黙りこくつて椅子に掛けている。その男の脳裏には、家に残した病妻と、それから、眼には見えないが、刻々に迫ってくる巨大な機械力の流れが描かれていた。すると、ある日その演出課のルームでは何か浮々と話が弾んでいった。フランスではじまったマキ匪団ひだんの抵抗が一しきり華はなやかな話題となっていたのだ。——彼はその映画会社の瀟灑しょうしゃな建物を出て、さびれた鋤道すきみちを歩いていると、日まわりの花が咲誇つていて、半裸体で遊んでいる子供の姿が目にとまる。まだ、日まわ

りの花はあつて、子供もいる、と彼は目にとめて眺めた。都会の上^{ひら}に展がる夏空は嘘^{うそ}のように明るい光線だった。虚妄^{きよもう}の世界は彼が歩いて行くあちこちにあつた。黒い迷彩を施されてネオンの取除かれた劇場街の狭い路^{みち}を人々はぞろぞろ歩いている。

「大変なことになるだろうね、今に……」

彼と一緒に歩いている友は低い声で呟^{つぶや}いた。と、それは無限の嘆きと恐怖のこもった声となつて彼の耳に残つた。

混みあう階段や混濁したホームをくぐり抜けて、彼を乗せた電車が青々とした野づらに、出ると、窓から吹込んでくる風も吻^{ほっ}と爽やかになる。だが、混濁した虚妄の世界は、やはり彼の脳裏にまつわりついていた。入社して彼に与えられた仕事は差当つて書

物を読み漁ることだけだった。が、遽か仕込みに集積される臍おぼろ気げな知識は焦点のない空白をさまよっていた。紙の上で学んだ機械の構造が、工場の組織が、技術の流れが……彼にはただ悪夢か何かのようにおもわれる。空白のなかを押進んでゆく機械力の流れ——それはやがて刻々に破滅にむかつて突入している——その流れが、動揺する電車の床にも、彼の靴さきにも、ひびいてくるようだ。だが、電車を降りて彼の家の方へその露次を這入はいつて行くと、疲労感とともに吻よみがと何か甦よみがえる別のものがある。それが何であるかは彼には分りすぎるぐらい分っていた。

家かたすを一步外にすれば、彼には殆ど絶え間なしに、どこかの片隅みで妻の神経が働きかけ追かけてくるような気がした。寝たま

まで動けない姿勢の彼女が何を考え、何を感じているのか、頻りしきりと何かに祈っているらしい気配が、それがいつも彼の方へ伝わってくる。どうかすると、彼は生の圧迫に堪たえかねて、静かに死の岸に招かれたくなる。だが、そうした弱々しい神経の彼に、絶えず気をくばり励まそうとしているのは、寝たまま動けない妻であった。起きて動きまわっている彼の方がむしろ病人の心に似ていた。妻は彼が家の外の世界から身につけて戻って来る空気をすっかり吸集するのではないかとおもわれた。それから、彼が枕頭ちんとうで語る言葉から、彼の読み漁っている本のなかの知識の輪郭まで感じとつているような気もした。

昨日も彼はリュックを肩にして、ある知りあいの農家のところ

まで茫々ぼうぼうとした野らを歩いていった。茫々とした草原に細い白い路が走っていて、真昼の静謐せいひつはあたりの空気を麻痺まひさせているようだった。が、ふと彼の眼の四五米メートル彼方で、杉の木が小さく揺らいだかとおもうと、そのまま根元からパタリと倒れた。気がつくと誰かがそれを鋸のこぎりで切倒していたのだが、今、青空を背景に斜に倒れてゆく静かな樹木の一瞬の姿は、フィルムの一齣ごまではないかとおもわれた。こんな、ひっそりとした死……それは一瞬そのまま鮮あざやかに彼の感覚に残ったが、その一齣はそのまま家にいる妻の方に伝わっているのではないかとおもえた。……農家から頒わけてもらったトマトは庭の防空壕ぼうくうごうの底に籠かごに入れて貯たくわえられた。冷やりとする灰ほのぐら暗い地下におかれたトマトの赤い皮が、上から

斜に洩れてくる陽の光のため彼の眼に泌みるようだった。すると、彼には寢床にいる妻にこの仄暗い場所の情景が透視できるのではないかしらとおもえた。

……生暖かい底に不思議な冷気を含んだ風がうつとりと何か現在を追憶させていた。彼はその街にある小さな図書館に入って、ぼんやりと憩うことが近頃の習慣となっていたのだ。

書物を閉じると、彼は窓際の椅子を離れて、受附のところへ歩いて行った。と、さきほどまで彼の頬に吹寄せていた生温かいが不思議に冷気を含んだ風の感触は消えていた。だが、何かかわらないが彼のなかを貫いて行ったものは消えようとしなかった。閲覧室を出て、階段を下りて行きながらも、さきほどの風の感覚

が彼のなかに残っていた。

それは沖から吹きよせてくる季節の信号なのだろうか。夏から秋へ移るひそかな兆きざしなら彼は毎年見て知っていた。だが、さきほどの風は、まるでこの地球より、もっと遙はるかなところから流れて来て、遙かなところへ流れてゆくものようだった。その中に身を置いておれば、何の不安も苦悩もなく、静かに宇宙のなかに溶け去ることもできそうだ。だが、それにしても何かかなしく心に泌しみみるものがあるのはどうしたわけなのだろう。

（人間の心に爽やかなものが立ちかえってくるのだろうか。）もしかすると何か全く新しいものの訪れの前ぶれなのだろうか。：彼はまだ、さきほどの風の感触に思い惑いながら往来に出て行

つた。人通りの少ない、こぢんまりした路は静かな光線のなかにあつた。煉瓦塀れんがべいや小さな溝みぞ川がわや楓かえでの樹などが落着いた陰翳いんえいをもつて、それは彼の記憶に残っている昔の郷里の街と似かよつてきた。

ほとんど総すべての物から 感受への合図が来る。

向きを変える毎ごとに 追憶を吹き起す風が来る。

何気なく見逃みのがして過ぎた一日が

やがて自分へのはつきりとした贈りものに成つて蘇る。

いつも頭に浮ぶリルケの詩の一節を繰返していた。

その春、その街の大学病院を退院して以来、自宅で養生をつづけるようになってからも、妻の容態はおもわしくなかつた。夜ひどい咳せきの発作におそわれたり、衰弱は目に見えて著しかつた。だが、彼の目には妻の「死」がどうしても、はつきりと目に見えて迫つては来なかつた。その部屋一杯にこもっている病人の雰ふん囲いき気も、どうかすると彼には馴なれて安らかな空気のようにおもえた。と、夏が急に衰えて、秋の気配のただよう日がやって来た。その日、彼女の母親は東京へ用足しに出掛けて行つたので、家の中は久しぶりに彼と妻の二人きりになつていた。

寝たまま動けない姿勢で、妻は彼の方を見上げた。と、彼も

また寝たまままで動けない姿勢で、何ものかを見上げているような心持がするのだったが……。

「死んで行ってしまう方がいいのでしよう。こんなに長わづらいをしてはいるよりか」

それは弱々しい冗談の調子を含みながら、彼の返事を待ちうけている真面目な顔つきであった。だが、彼には死んでゆく妻というものが、まだ容易に考えられなかった。四年前の発病以来、寝たり起きたりの療養をつづけているその姿は、彼にとってはもう不変のもののようにさえ思えていたのだ。

「もとどおりの健康には戻れないかもしれないが、だが寝たり起きたり位の状態で、とにかく生きつづけていてもらいたいね」

それは彼にとって淡い慰めの言葉ではなかった。と妻の眼には
吻と安心らしい翳りが^{ひろが}拡った。

「お母さんもそれと同じことを云っていました」

今、家のうちはひっそりとして、庭さきには秋めいた陽光がチ
ラついていた。そういう穏かな時刻なら、彼は昔から何度も巡^{めぐ}
あつていた。だから、この屋根の下の暮しが、いつかぷつりと截^た
ち切られる時のことは、それに脅かされながらも、どう想像して
いいのかわからなかった。

どうかすると妻の衰えた顔には微^{かす}かながら活^{いきいき}々とした閃^{ひらめ}きが
現れ、弱々しい声のなかに一つの弾^{はず}みが含まれている。すると、
彼は昔のあふれるばかりのものが蘇^{よみが}ってくるのを夢みるのだった。

まだ元気だった頃、一緒に旅をしたことがある、あの旅に出かける前の快活な身のこなしが、どこかに潜んでいるようにおもえた。綺麗好きの妻のまわりには、自然にこまごましたものが居心地よく整えられていたし、夜具もシイツも清潔な色を湛えていた。それらには長い病苦に耐えた時間の祈りがこもっているようだった。壁に掛けた小さな額縁には、蔦の絡んだバルコニーの上にくつきりと碧い空が覗いていた。それはいつか旅で見上げた碧空のように美しかった。

今にも降りだしそうな冷え冷えしたものが朝から空気のなかに顫えていた。電車の窓から見える泥海や野づらの調子が、ふと彼

に昨年の秋を回想させるのだった。……一年前の秋、彼と妻の生活は二つに切離されていた。糖尿病を併発した妻は大学病院に入院したが、これからはじまる新しい療養生活に悲壮な決意の姿をしていた。その時から孤独のきびしい世界が二人の眼の前に見えて来たようだった。彼は追詰められた気分の中にも何か新しく心が研とがれて澄んでゆくようだった。それは多少の甘え心地を含んだ世界ではあったが、ぼんやりと夢のような救いがどこかに佇たたずんでいるのではないかと思えた。……熱にうるんだ妻の眼はベッドのなかでふるえていた。

「こないだ、三階から身投げした女がいるのです。あなたの病気は死ななきや治なおらないと云われて……」

冷え冷えとした内庭に面した病室の窓から向側の棟をのぞむと、夕ぐれ近い乳白色の空気が硬い建物のまわりにおりて来て、内庭の柱の鈴蘭灯に、ほっと吐息のような灯がついていた。あのもの云わぬ灯の色は今でも彼の眼に残っているのだったが……。

だが、彼はつい先日その大学病院を訪ねて行って大先生に來診を求めたときの情景がまざまざと甦ってくる。看護婦が持つて來た四五枚のレントゲン写真を手にして眺め入ったまま、大先生は暫く何も語らない。それから妻の入院中の診断書類を早目に一読していたが、

「それでは今日の夕方お伺いしましょう」と彼に來診を約束した。それから、大先生が來るといふことは彼の妻にとっては大變な期

待となつた。妻はわざわざ新しい寝巻に着替えて約束の時刻を待っている。彼は家の外に出て俚くるまの姿を待った。冷えて降りだしそうな暗い空に五位ごいさぎ鷲が叫んでとおりすぎる。そうして待ち侘わびていると、ふと彼は遠い頼たよりない子供の心に陥落されていた。俚わがやつて来たのは彼が待ち侘わびて家に戻つて来た後だった。大先生は妻の枕頭に坐つて、丁寧に診察をつづける。羽毛をとりだして病人の足の裏を撫なでてみたり、ものなれた慎重な身振りだったが、靴かばんから紙片をとり出すと、すらすらと処方箋しよほうせんを書いた。

「二週間分の処方をしておきますから、当分これを飲みつづけて下さい」

そうして、大先生は黙々と忙しそうに立上る。彼が後を迫つて

家の外に出ると、既に俵は走りだしている。それは何か熱いものが通過した後のようにぐったりした心地だった。さきほどまで気の張りつめていたらしい妻も、ひどく悲しく疲れ顔で押し黙っている。さきほど用意したまま出しそびれていた蜜柑みかんの罐かんづめ詰めが彼の目にとまった。それを皿に盛って妻の枕頭に置くと、

「ああ、おいしい」妻は寝たまま、まるで心の渴かわきまで医いされるように、それを素直にうけとる。佻しく暗い気分のなかに、ふと蜜柑の色だけが吻と明るく浮んでいるのだった。……だが、その翌日彼が街に出て処方箋どおり求めて来た散薬は、もう妻の口にまるで喜びを与えなかった。何かはつきりしないが、眼に見えて衰えてゆくものがあつた。気疎けうとそうな顔つきで、妻はぼんやりと

焦点のさだまらぬ眼つきをしている。あの弱々しい眼のなかから、パツと一つの明るいものが浮びあがったら……彼は電車の片隅かたすみでぼんやりと思い耽ふけっていた。

今にも降りだしそうな冷え冷えしたものは、そのまま持ちつづいて、街も人も影のように薄暗かった。家を出てから続いている時間が今でも彼には不安な容態そのもののおもえた。映画会社の廊下を廻り演出課のルームに入っても、彼は影のように壁かべがわたたずに佇たいでいた。

「奥さんの病気はどうかね」と友人が話しかけて来た。

「よくない」彼はぽつんと答えた。こんな会話をするようになってたのかと、ふと彼には重苦しく愁わしいもののがつけ加えられるよ

うだった。

冷え冷えとしたものは絶えずみうちに顫えてくるようだったが、試写室に入ると、いつものように巨大な機械力の流れが眼の前にあった。フィルムの放つ銀色の影も速度も音響もその構成する意味も、彼にはただ、やがて破滅の世界にむかつて突入している奔流のように無気味におもえた。だが、無数の無表情のなかに、ふと心惹ひかれる悲しげな顔が見えてくることもある。ふと、その時、試写室の扉が開いて廊下の方から誰か呼出しの声があった。瞬間、彼はハッと自分の名が呼ばれたのではないかと感った。……試写が終わってドカドカと明るい廊下の方へ人々が散じると、重苦しい魔ものの影の姿も移動する。狭い演出課のルームの椅子は一杯に

なり議論が始まるのだった。だが、こうして、こんな場所に彼が今生きていることは、まるで何かの間違ひのようにおもえてくる。今は斃うなされるような感覚ばかりが彼をとりまいていたのであった。刻々にふるえる佻しいものが会社を出て鋪道ほどうを歩きながらも、彼に付きまどっていた。混みあう電車に揺られながら、彼はじつと何か悲痛なものに堪えている心境だった。だが、電車が広漠とした野を走りつづけ、見馴れた芋畑や崖がけくさむらの叢が窓の外に見えて来たとき、外はしきりに雨が降りつづいていた。まるで、それは堪えかねて、ついに泣き崩くずれてしまったものの姿だ。こんなにも悲しい、こんなにも悲しいのか、……何が？ 冷え冷えとした真暗な底に突落されてゆく感覚が彼の身うちに喰くいこ込んで来る。こんなに

も悲しい、こんなにも悲しいのか、何が……？　この訳のわからぬ感傷は今かぎりのものなのだろうか、やがて別の日が訪れてくれば消え失せてしまうのだろうか……ぼんやりと彼がおもい惑っている、ぼつと電灯がついて車内は明るくなった。と、灯のついている彼の家の姿が、びしよ濡れぬの闇やみのなかにもすぐ描かれた。

「お母さん、お母さん」

今、目ざめたばかりの彼はふと隣室で妻のかすかな声をきくと、寢床を出て台所の方にいる母親に声をかけた。それから、その弱々しいなかにも何か訴えを含んでいる声にひきつけられて、彼は妻の枕頭ちんとうにそつと近寄ってみた。妻の顔は昨夜からひきつづい

ている不機嫌な苛々したものを湛えていた。だが、それは故意にそうしている顔ではなく、何かもう外界の空気に堪えられなくなり、外界から拒否されたものの姿らしかった。瞼はだるそうにすぼめられ、そこから細く覗いている眸はぼんやりと力なく何ものをかを怨じていた。

……一週間前に、妻は小さな手帳に鉛筆で遺書を認めていた。枕頭に置かれていたので彼も読んでそれは知っていた。けれども、それを認めた妻も読んだ彼も、ほんとうに別離が切迫したものはまだ信じきれないようだったのだ。

昨日の夕方、電車を降りて彼が暗い雨のなかを急込んで戻ってくると、家には灯のついた病室が待っていた。彼は妻の枕頭に屈

んで「どうだったか」と訊ねた。

「今日は気分も軽かったのに、お母さんがひとりでおろおろされるので何か苛々しました」

枕頭に食べさしの林檎りんごが置いてあった。林檎が届いたら、と長い間持ち望んでいたのだが、注文の荷が届いたときには、これはもう彼女の口にあわなくなっていたのだ。ふと、妻は指の爪つめで唇の薄皮をむしりとりとうとした。

「どうしてそんなことをするのだ」

「……………」妻は無言で唇の皮を引裂いた。

……………今、朝の光線で見ると、昨夜傷けた唇はひどく痛々しそうだった。やがて、母親が食膳しょくぜんを運んでくると妻は普段のよう

に箸をとつた。だが、忽ち悲しげに顔を顰めた。それから、つらそうに無理強いに食事をつづけようとした。殆ど何かにとり縋るようにながら悶え苦しんで食事を摂ろうとする姿は見るに堪えなかつた。これははじめて見る異様な姿だつた。それから重苦しい時間が過ぎて行つた。昼の食事は母親がいくらすすめても遂に摂ろうとしなかつた。日が暮れるに随つて、時間は小刻みに顫えながら過ぎて行つた。

夕食の用意が出来て枕頭に置かれた。が、妻は母親のすすめる食事を厭うように、わずかに二箸ばかり手をつけるだけだつた。電灯のあかりの下に、すべてが薄暗くふるえていた。食後の散薬を呑んだかとおもうと、間もなく妻は吐気を催して苦しみだした。

今、目には見えないが針のようなものがこの部屋のなかに降りそそいでくるようだった。

……ずっと以前から彼も妻も「死」についてはお互によく不思議そうな嘆きをもつて話しあっていた。人間の最後の意識が杜絶^{とだ}える瞬間のことを殆ど目の前に見るように想像さえしていた。少女の頃、一度危篤に瀕^{ひん}したことがある妻は、その時見た数限りない花の幻の美しかったことをよく話した。それから妻は入院中の体験から死んでゆく人のうめき声も知っていた。それは、まるで可哀^{かわい}相^{そう}な動物が夢でうなされていような声だ、と妻は云っていた。彼も「死」の幻影には絶えず脅かされていた。が、今の今、眼の前に苦しみだしている妻が死に吹き攫^{さら}われてゆくのかどうか、

彼にはまだわからなかった。「死」が彼よりさきに妻のなかを通
過してゆくとは、昔から殆ど信じられないことだったのだ。だが、
たとえ今「死」が妻に訪れて来たとしても、眼の前にある苦しみ
の彼方かなたに妻はもう一つ別の美しい死を招きよせるかもしれない。
それは日頃から彼女の底にうつすらと感じられるものだった。彼
も今、最も美しいものの訪れをはげしく祈った。……………

胃にはもう何も残っていそうもないのに、妻はまだ苦しみつづ
けた。これはまるで訳のわからぬことだった。

「よく腹を立てるから腹にしこりが出来たのかな」彼はふと冗談
を云っていた。

「この頃ちよつとも腹は立てなかったのに」と妻は真面目まじめそうに

応こたえた。そのうちに、妻は口の渴かわきを訴えて、氷を欲しがった。隣室で母親は彼に小声で云った。

「もう唾液だえきがなくなつたのでしよう」

それから母親は近所で氷の塊かたまりを頒わけてもらつて来た。氷があつたので彼は吻ほっと救われたような気がした。氷は硝子ガラスの器から妻の唇を潤おした。うとうとと眼を閉じたまま妻の痛みはいくらか落着いてくるようだった。

夜はもう更ふけていた。彼は別室に退いて横臥おうがしていた。が、暫くすると母親に声をかけられた。

「お腹なかを撫なでてやって下さい。あなたに撫なでてもらいたいと云つています」

彼は妻の体に指さきで触れながら、苦しみに揉まれてゆくような気がした。妻の苦しみは少し鎮ま^{しず}っては、また新しく始^はつて行^いつた。彼は茫^{ぼう}とした心のなかに、熱い熱い疼^{うず}きがあつた。これが最後のだろうか。それなら……。だが、今となつてはもう妻にむかつて改めてこの世の別れの言葉は切りだせそうもなかつた。言い残すかもしれない無数のおもいは彼のなかに脈打つていた。妻はまた氷を欲しがつた。それからまた吐き気を催し、ぐつたりとしていた。

「もう少しすれば夜が明けるよ」

かたわらに横臥^{うなず}して、そんなさりげないことを話しかけると、妻は静かに頷^{うなず}く。そうしていると、まだ妻に救いが訪れてくるよ

うで、もう長い長い間、二人はそんな救いを待ちつづけていたような気もした。そして、これは彼等らの穏やかな日常生活の一ときに還かえつてゆくようできえあつた。だが、ふと吃驚びっくりしたように妻は胸のあたりの苦しみを訴えだした。その声は今迄までの声とひどく異つていた。それは魔にうなされたように、哀切な声になつてゆく。愕然がくぜんとして、彼も今その声にうなされているようだった。病苦が今この家全体を襲いゆさぶつているのだ。

彼が玄関を出ると、外は仄ほのぐら暗い夜明だった。どこの家もまだ戸を鎖とぎしていたが、町医のベルを押すと、灯がついて戸は開いた。医者は後からすぐ行くことを約束した。

家に戻つて来ると、妻の苦悶くもんはまだ続いていた。「つらいわ、

つらいわ」と、とぎれとぎれに声は波打つようだった。彼はその脇わきに横臥するようにして声をかけた。

「外はまだ薄暗かったよ。医者はずぐ来ると云っていた」

妻は苦しみながらも頷いていた。妻が幼かったとき一度危篤に陥つて、幻にみたという美しい花々のことがふと彼の念頭に浮んだ。

「しっかりとしてくれ。すぐ医者はやってくるよ。ね、今度も一度君の郷里へ行ってみよう」

妻はぼんやり頷いた。玄関の戸が開いて医者がやって来た。医者あえの来たことを知ると、妻は更に辛つらそうに喘いで訴えた。

「先生、助けて、助けて下さい」

医者は静かに聴診器を置くと、注射の用意をした。その注射が済むと、医者は彼を玄関の外に誘った。

「危篤です。知らすところへ電報を打ったらどうです」

医者はとつと立去った。彼は妻の枕頭に引返した。妻はまだ苦悶をつづけていた。

「どうだ、少しは楽になったか」

妻は眼を閉じて嬰兒えいじのように頭を左右に振っていた。暫くすると、さきほどから続いていた声の調子がふと變つて来た。

「あ、はや迅い、はや迅い、星……」

少女のような声はただそれきりで杜切とぎれた。それから昏睡こんすい状態とうめき声がつづいた。もう何を云いかけても妻は応えないの

であつた。

彼は急いで街へ出て、郷里の方へ電報を打つておいた。急いで家に戻つて来ると、玄関のところ、まだ妻のうめき声がつづいているのを耳にした。その瞬間、今はそのうめき声がつづいてることだけが彼の唯一のたよりのようにおもえた。

彼は妻の枕頭に坐つたまま、いつまでも凝としていた。時間は過ぎて行き、庭の方に朝の陽が射^ひして来^さた。あたりの家々からも物音や人声がして、その日は外界はいつもと変りない姿であつた。昏睡のままうめき声をつづけている妻に「死」が通過しているのだらうか。いつかは、妻とそのことについてお互に話しあえそうな氣もした。だが、妻のうめき声はだんだん衰えて行つた。やが

て、その声はもうねり高まったかと思うと、息は杜絶えていた。

(昭和二十五年四月号『群像』)

青空文庫情報

底本：「夏の花・心願の国」新潮文庫、新潮社

1973（昭和48）年7月30日初版発行

入力…tatsuki

校正：林 幸雄

2002年1月1日公開

2005年11月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

美しき死の岸に

原民喜

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>